

教職課程センターだより 第11号

発行日 2014年3月27日

青天の霹靂

教職課程副センター長 大和田孝士



昨年の12月、緊急に入院・手術を受けることになった。青天の霹靂ともいうべき生涯初めての手術である。自分は一生手術を受けるなどということはないだろうと、ヘンな自信を持っていた。だから同年代の人達がしているような散歩であるとか体操であるとか、身体に良いとされることに精を出したことは一度もない。

私を執刀してくれた先生は、まだ6年目の若い独身の女医さんである。手術は腹を開くのためだから当然といえば当然だが、手術台にのせられ素っ裸にされ、先ず横向きになり猫のように背中を丸めるようにいわれ、脊椎に針が打たれた(後に分かったのだが、痛み止め・モルヒネではない・が定期的に体内に入るようにするための処置)。その直後麻酔を嗅がされたのだと思うが、あっという間に意識がなくなった。気がついたのは病室に運ばれ、ベッドに寝かされるときだ。午後7時頃だった。およそ2時間半から3時間あまりの手術だったと思われる。

鼻には酸素吸入の管、腕には点滴、背中からは痛み止め、さらには導尿の管と腹部からよく分からない管と計5本の管が身体に刺さっていた。勿論声も腹部に力が入らないためかしっかり出

ない。こんな状態に置かれることは無論初めてなのだが、「もうなるようになれ」と思っていたせいかな不安はなかった。ただ上を向いてばかりの姿勢で腰(背中)が痛くあまり眠れなかった。

翌朝からは、午前6時40分頃には看護師さんの定期的な検診があり、何ら容赦のない腹部の観察(時に触診)、そして検温と血圧測定、優しい言葉がけや励ましの言葉などは「よく眠れましたか」以外はゼロである。さらに非情な言葉は続くのである。「歩いてくださいよ」である。ベッドから起き上がった横になることがこんなに大変だと思ったことはなかったのにである。手術の次の日(酸素吸入の管だけはとれていた)から毎日看護師センターを中心に病棟を歩き、徐々に1周から2周3周と増やしていった。

退院に関しても、あまり親切心、いたわりの感じはなかったように思う。年末年始で執刀して下さったドクターはお休みである。毎朝担当のドクターの回診がある。ある朝の回診、どうも部長さんの回診だったようだ。私の腹帯を開け、手術跡をみるなり「ああ、いいね。もう退院してもいいよ。どうだね」。「家に帰るの嫌かね。僕なら絶対帰るね」と。私「はあ、・・・」。主治医から言われていた退院予定日より早い、これらの言葉で、「じゃあ退院しようか」と思ったのは確かである。

退院後、家では雨の日も風の日も、体力の回復を願うとともに普通に歩けることの喜びをかみしめながら、相変わらず3千歩から4千歩を歩いている。

学生諸君は「健康」とか「病気・入院」などということは考えたこともないと思うが、健康でないと何もできないし、何をしても面白くないです。先輩諸兄の警告や注意はよく守り、呉々も健康には十分留意をし、所期の目的達成に邁進してください。



遁 辞 の 弁

子ども発達学部 生江 明 (政治学)

本学を退職するに際し、私が学部教育だけでなく、とりわけ教職課程教育において自らに課していた、あるいは、心に留めていた幾つかの点を書き残したい。

第一に、学生たちを「子ども扱い」することの犯罪性である。私は大学時代から30代末まで東北地方のフィールドワークに携わりながら民衆政治思想史を探求してきた。その後、縁あってアジアやアフリカの開発途上国における社会開発領域の仕事に従事してきた。そこで出会ったのは、自らを先進人あるいは大人と考え、傲慢にも教えたがり与えたがる人々であった。私もその一人である。

相手を「子ども扱い」することは、自分=おとなの言うことを聞き、正解を知り、それを覚えなさい、ということの結果しがちである。相手が、自分で考えることをやめ、私の後を付いてくることを強いるやり方を、私は、ある意味では肯定していた。しかし、最終講義でも述べたが、それは文化的帝国主義の先兵のあり方であり、その傲慢な自分が崩れ、それまでの教化教育の対象である現地の人々に学ぶことを始めた時から、私の人生の姿は大きく変化した。高校（都立戸山高校）の入学式で「君たちをおとなとして扱います」という先生の言葉を聞いてから25年がたっていた。深く学ぶことは効率的に学ぶことでは、かなわぬものであることを痛切に思う。

このことを本学の講義の中にも取り入れ、学生たちと共に課題を考え、答えを求める過程そのものを講義（授業）とすることに努めてきた。教室の中にいる学生たち自身が、互いに、自分たちの考えを交換しながら、考えを深めていくことが、現代日本においてきわめて大切な教育課程である。考えることをやめ、自動販売機から望みの物が落ちてくるのを待つだけと言える状況を少しでも変えたいと考えたからである。これは学生だけでなく、私たち現代の日本人に不可欠なものでもあるだろう。

第二は、社会倫理としての基本的人権を学ぶことである。知識としての基本的人権でなく、人間の倫理としての基本的人権を学ぶことを、私は講義の中でどのように伝えるかと格闘してきた。それは違ふと他者に向けて指し示す指が、自分自身にも向けられる時、倫理となる。日本社会全体が、倫理よりは目先の利益や問題解決に眼を奪われ続けている時、学生たちは未来への如何なる希望を持ちえるのか、この疑問は今も続いている。

第三は、次の社会の担い手を養成することである。それには現代社会の問題や課題を鋭く読み解く力と心が、私たちには必要である。勝ち組・負け組というような社会の分断を消極的にせよ認めることは、この次の時代、次の社会の新たな担い手を養成することを放棄することに等しい。ある意味で、教育という社会的活動の自己否定であると考えられる。その一つが先に述べた「おとなとこども」の二極分解でもある。自らが考えることなく、マニュアルを覚えることは、次の時代を用意しない。失敗があったとしても、マニュアルの誤りか、マニュアル通りにしなかった者の誤りとなり、失敗は学ばれない。学びは豊かなものである。そして、失敗を共有する人々が社会を生み出していく。

これら三つのことが、私の本学における教員として心してきたことどもである。そして、今後の他校での教育の中や、自らの社会活動の中でさらに追求していきたい。 (2014年2月26日)

第7回教育実践交流会報告

去る2月15日（日）、教職課程センター主催の教育実践交流会が本学において開かれました。午前中は、本学卒業生であり県立豊田高等養護学校長の栗原啓二さんが「教育の動向と教師像」と題して、国や愛知県の特別支援教育に関する最新情報、教員採用試験の面接官・管理職の立場から現場が求める教師像について講演されました。午後からは小学校、特別支援学校、福祉科教育の3分科会に分かれ、現場の先生方8名から実践報告を受けました。小学校部会では、藤田真歩さんは、自信がなく、やりたいことを自由にやれない状況にいる子どもたちに、自信や意欲、積極性を持たせ、楽しい学校生活を送ることができるようにとの思いから取り組んだクラス実践を、川井啓代さんは、新任として初めて受け持った3年生クラスの学級づくりと問題行動への対処など「学級経営での実践」を報告しました。

また、特別支援学校部会では、山田早苗さんが4年生の生活単元学習「おでかけわくわく」の授業実践を、道廣優佳里さんが「新任教員として1年を通して」と題し高等部での防災教育の取り組みを、檜垣栄慈さんが「認知心理学の視点から授業を考える」というテーマで、ワークショップ形式で授業づくりの実践を、今井友男さんが小学部での効果的な学習を行うための、関連性の高い教科・単元を合わせて指導を行う「校内研究の実践記録」を報告しました。福祉教育分科会では、高木諒さん、山田

夏美さんから実践報告を受け、福祉教育の課題について参加者で討議を深め、実りの多い学びの場となりました。

今回の交流会では、初めて分科会形式を取り入れ、参加者の学びを深めることに力点を置きました。会自体は、卒業生17名を含む参加者数41名となり、卒業生同士の交流と学びの場づくりとしてはまずまずの成果をあげることができました。しかし、在学生の参加が少なく、時期決定や準備・広報のあり方などに課題も残りました。なお、参加者数の内訳は、大学教員8名、報告者を含めて卒業生17名、学生16名の参加でした。

（文責：高須）



教育実践交流会に参加して

社会福祉学部社会福祉学科 3年 荒川穂乃香

実践交流会では、午前に特別支援教育の現状についての講演を聞きました。愛知県だけでなく全国的に特別支援教育が重要視されているということを知りました。障害の有無に関係なく、すべての子どもの学びを保障することは大切なことで、教員を目指している私たちも忘れてはならないことだと思います。

午後からの分科会では、特別支援教育の実践報告を聞きました。指導方法を試行錯誤していくなかで、教師と児童生徒の信頼関係が築かれるのだと思いました。実際に指導の際に使用した教材を持ってきてくださったので、なかなか実物に触れる機会がないため、教材のイメージを持つことができました。また障害児教育には終わりが無いということ、子どもと向き合っても時間がかかっても一緒に前に進んでいくことの大切さを学びました。ただ実践するのでなく、子どもの可能性を信じるのが指導の根底にあるのだと思いました。どの先生方も、子どものことが大好きだということが話を聞いているなかで感じられました。

交流会を終え、今まで以上に先生になりたい！という気持ちと、子どもの成長や学びと一緒に感じたいという思いが強まりました。教育実習では、楽しみと不安どちらも同じくらいあります。生徒と関わっていくなかで、生徒一人一人の良さを見つけることを目標に実習に臨みたいです。これからもコツコツ努力を惜しまず、頑張ろうと思います。



合格体験発表会

12月19日に学内で合格体験発表会が開かれました。



合格体験談を聞いて

子ども発達学部心理臨床学科3年 村上里佳

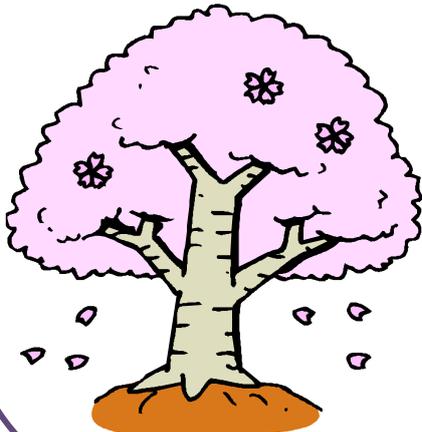
四年生の合格体験発表会に参加して、とても良い刺激となりました。今までの自分を思い返し「このままではダメだ！このままだと落ちる」という気持ちになり、どういった教員になりたいのか、そのためにはどうすれば良いのか前向きに考える良い機会となりました。

合格体験記の中で、自分の勉強法や教員採用試験の面接でのことを詳しく話してくれた先輩、面接では誰にも負けない熱い気持ちで臨んだとその場で実際に見せてくれた先輩や合格するために将来に繋がることへ自分から積極的に取り組んでいた先輩、たくさんの貴重なお話が聞けて良かったです。

また、そんな合格された先輩方は一人ひとりに素敵な魅力があると感じました。具体的に自分の思い描く教師像があり、教員になりたい！という揺るがない気持ちがあるからこそ合格されたのだと思います。そう感じたのと同時に、今の私には他の誰にも負けない何かがあるのかと考えてみると、見つけ出すことが出来ませんでした。しかし、私には“特別支援教諭として働きたい”という夢があります。今回の合格体験談を聞いて、私自身もよりその夢が強まりました。

そのためには、日々の積み重ねが大切になってくると思います。勉強はもちろん、アルバイトやボランティアでもたくさんの知識を吸収したり、色んな人と触れ合うことを通して様々な経験をしたりして、自分をより魅力のある人間に成長させたいと思いました。

貴重なお話を下さった先輩方や、このような機会を設けて頂いた先生方にも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



① “やっと慣れてきた” からこそ見えてきたこと

教員となってまる二年が経ち、最近やっとこの仕事に慣れてきたなと実感しています。毎日慣れない授業準備や担任業務、その他いろいろな仕事と戦いながら、今日まで何とかやって来たという感じです。1年目は特に、やるべき事をこなしていくのに精一杯で、毎日体も心もクタクタでした。朝の通勤電車の中で熟睡してしまい、生徒に起こしてもらうことも（笑）。「来年も教員をやれているのかな」と不安になることもしばしば。それでも、何とか周りの先生、かわいい生徒たちに支えられて、今日まで来ました。そして、少しずつ教員という仕事や自分自身について考える余裕ができました。教員3年目を迎える今の私だからこそ、見えてきたことについてお話します。

② 担任として “生徒指導の難しさ” “大変さの中の喜び”

去年に続いて、今年度も1年生の担任をしています。教壇に立って、クラスの全員から視線を向けられた中で話しをする事にもいつの間にか慣れ、毎朝教室に入った瞬間から、36人の担任になっています。素直で人なつっこい生徒たちとの学校生活は、ときにはお互いにぶつかることもあります。可愛さは増すばかりで、毎日楽しく過ごしています。それと同時に、生徒の集団の中での生活をリードしながら指導していくという、担任の役割の大きさや責任も感じています。遅刻や無断欠席、人を傷つける言葉や行動がいけないことは、当たり前のことです。しかし、なぜそれが許されないのか、その理由を具体的な例を挙げながら、上手く想像できない生徒にも理解しやすく伝えることは、本当に難しいことです。自分自身の経験やそれを通して考えたこと、感じたことを大切に、私自身の言葉で伝えることが目標です。

担任で良かったと思えるのは、生徒が変わった、成長したという姿をいちばん近くで実感できることです。入学当初はとても幼かった生徒達が、顔つきも行動も大人びて落ち着いてくる姿には、本当に驚かされます。人間が大きく成長し、変化する大事な時を共有させてもらえるのは、とても幸せなことです。3年間を通した彼らの成長を楽しみにしながら、これからも担任として頑張っていこうと思っています。

③ 授業で “試行錯誤の連続、その中で大切にしたいこと”

授業は、何と言っても、教師と生徒たちとのコミュニケーションが成立しなければ、上手くいきません。まずは生徒を知ること、私という人間を知ってもらうことからのスタートでした。お互いのことがわかってくると、本当に授業はしやすくなりました。ただ、生徒と年齢も近いので、授業での指導権を持ち続けるためにも、一定の距離感を保つことを意識しています。そこが今いちばん難しいと感じている私の課題でもあります。

今年は、できる努力をしないで、「私はできないから」と思い込んでいる生徒をどうにか変えたいという目標で授業をしてきました。教材や小テストなどの工夫もしてみましたが、それ以上に生徒の変化が感じられたのは、生徒たちに対する期待の気持ちを、しつこいくらいに伝え続けたことです（笑）。「本気になってやってないだけ。もったいないな。」「次の小テストは〇点以上とれるよね。期待してるよ!」と、普段の授業の時や、小テストのメッセージとして、伝え続けました。その中で、以前より努力する生徒たちの姿が見られて、とても手応えを感じ嬉しく思っています。これからも、生徒が「ちょっとがんばってみようかな」と思えるきっかけをつくっていきたいと思います。

⑤ 教員を目指すみなさんへ

教師は、毎日生徒と関わることで、自分自身も成長できる仕事です。教師になるということは、生徒が見る大人の代表になるということだと思います。私自身の反省から、みなさんには、いろいろな経験をして、より自分という人間を豊かにすることを勧めたいと思います。専門教科の勉強はもちろんですが、趣味に勤しんだり、文化や美術、自然に触れたりする時間も、自分の感性や想像力、知識を肥やしてくれます。今残っている時間を大切に、自分に食欲に教師を目指して下さい。

教員を目指す方へ



名古屋市立西陵高校教諭 山田 夏美 (2011年度卒業)

みなさんこんにちは。私は現在、介護福祉士と初任者研修（旧：ホームヘルパー2級）を養成する総合学科で勤務しています。生徒は1年次で一般教科をしっかり学び、2年次からは自分が希望する進学や就職を実現するために最も適した「系列」を選択します。学校全体でみると、開講している科目数が非常に多いため慌ただしいこともあります。部活動が盛んであることや挨拶のできる生徒に囲まれながら毎日楽しく過ごしています。

そんな学校での生活も1年が過ぎようとしています。私は1年間別の高校で講師を経験してから正規採用として勤務しています。講師では体験できない業務内容・多さに戸惑い、また関わる生徒について様々な変化に気づくことができず悩むこともありました。そうした時、支えになったのが先輩の先生方のアドバイスでした。「1年目の仕事は、色々な人から聞くことである」。この言葉は学生時代から聞いたことはありましたが、この1年を通して人から聞くことの大切さを感じることができました。何事も1人で解決するのではなく、相談や疑問として他者に助言をいただくことが自分の視野を広げたり人間関係を円滑にする方法でないかと思えます。

また生徒との接し方に関してでも大切なのが、決めつけないことだと思います。色々な先生からの情報から、「この子はこういう子だ」と捉えることもあるかもしれません。しかし「この子はこういう子なのかな？」と、常に疑問や問いかけを持ち接することが生徒の成長、教員の指導力の成長につながると思います。「若いから何でもできる」と言いますが、体力や行動力だけでなく「若いから柔軟な考えができる」ということに置き換えられるのではないのでしょうか。

教員は教科指導をはじめ校務分掌や部活動など、行う業務は多岐に渡ります。同時に関わる人も生徒だけでなく同僚の先生や保護者、外部の方などがおり仕事をする難しさや大変さはあると思います。しかし、生徒同様努力した分成長や評価がでてくる魅力的な職業でもあると思います。努力するためには目標を決める必要があります。みなさんの目標は何ですか？ぜひ、採用試験合格の先を見据えた学校現場での目標を立ててみてください。教育実習先の生徒に何を伝えたいのか。部活動で関わる生徒に何を身につけてもらいたいのか。授業でどんなことを学んでほしいか。沢山考えることはできると思いますので、新学期が始まるまでに1つは考えてみてください。具体的であればあるほどみなさんのやる気を上げるものとなります。夢実現に向けて頑張ってください。

今後の予定

【新2年生】

3月27日（木）4限 1251教室 教職課程オリエンテーション

3月24日（月）～3月29日（土）17:00まで 課程登録期間

☆上記オリエンテーションに出席後、課程履修費の納入及び課程登録を行ってください。

【新3年生】

4月12日（土） 教職課程オリエンテーション

☆教育実習の意義・内容・関係書類手続きについてのオリエンテーションを行います。

【新4年生】

4月12日（土） 教職課程オリエンテーション

☆教育実習にあたっての諸注意などのオリエンテーションを行います。

